

- 「実顕地一つからの出発」を研鑽するなかで、
「本当の一体とはどんなものか」について、ますます研鑽したくなってきた。

「ところが、これは自分ひとりでない ——みんなそれだと思いうんですが—— ややもすると、この目先のいろいろのものに拘泥して、案外、方向が違って行って、手段を目的のように取り違えるのが、ほとんどの、現在の、現在までの世界の人達の、どうにもそういう社会が出来なかった原因だと思う。(略)

そして実は、いったんお金が儲かって、やはり『あつ、これでなかったな』と気づく人が少ないほど、一つの観念が入り込んでいた、と。そういうことも気づかれて、『なるほど、鶏でない、目的は鶏でない』と。(略)

やはり鶏を飼うにしても、何するにしても、効果的に目的へ近寄っていくためには、やはりそれより先にまず飼う人の問題、養鶏する人の問題、そこが基本になる。

その人が目的をはっきり知る、それにはどうあるか—— こうなってくる。

そうすると、現象面よりまず先に心の世界、無現象のというか、
心の状態がどうあったなればいいか、ということ」

(ヤマギシズム社会式養鶏法について)

- ここでの「目的をはっきり知る」とは……。

- しかし、私たちヤマギシズムの絶対社会の理念の基で暮らしていながらも、未だ少し各種関係面や損得計算が潜在して、無意識にお互いを縛り縛られ合う不自由感を味わっている。
例えば、「誰のものでもない」と言いながら、心をこめて育てたものを粗雑に使う人を見たり、その活かし方まで指図する人がいたりすると、心がざわつくのは何故なんだろうか。
真に誰のものでもないならば、
誰が使っても如何様に使われてもよいはずではないだろうか？
「誰のものでもない」が観念（知識）で止まっているからだろうか。

- その場合、粗雑に使う人や活かし方まで指図する人に求めたり変えようとしなくても、心から一つを念願する自分から、その自分の願いをますます明確にして、その行為が顕れていくようにはかることではないだろうか。
例えば、心にもないおつき合いの寄進とわかれば箸もつけないとか、好ましくない方向へは後押ししないとかいう、
形に顕す実動行為が求められているのではないだろうか。

- そのためにも「現象面よりまず先に心の世界」、
まず一体の人に自分自身が成るのが目的で、
谷底へ転がり落ちてでも一体で、全部一体に委して、別々の立場で分担しながら、
心からいける方法をとりたいものだ。